

neo

⚕ MEDICAL INFORMATION MAGAZINE ⚕

Autumn
2024

#05



すこやかなる日々を医療と共に。

福井大学学術研究院医学系部門
器官制御医学講座
泌尿器科学分野 教授

寺田 直樹

医療法人林病院
病院長

服部 泰章

福井県立看護専門学校
校長

西田 美幸

福井大学医学部附属病院
眼科 教授

稲谷 大

02

Doctor's Hand

福井大学学術研究院医学系部門 器官制御医学講座
泌尿器科学分野 教授

寺田 直樹

10

Medical LANDSCAPE

医療法人林病院 病院長

服部 泰章

16

福井県立看護専門学校
校長

西田 美幸

副校長

黒川 洋子

24

Professor's Voice

福井大学医学部附属病院 眼科
教授

稲谷 大

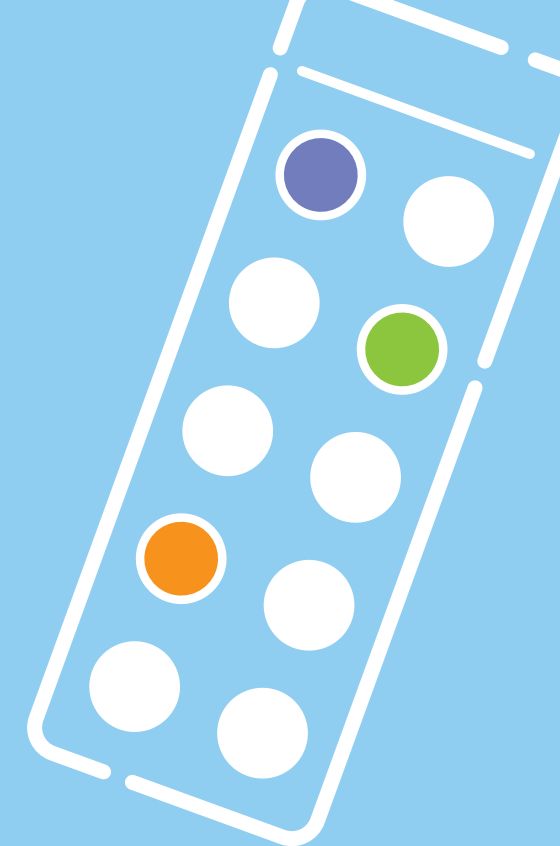
STAFF

Project Design 坂口 俊克
Writer 白鳥 幸代
Photographer 藤森 祐治
Designer 吉田 真人／西村 恭子
Cover Design 101%

発行／スギメディカル株式会社
〒101-0044
東京都千代田区鍛冶町二丁目 6 番 1 号
堀内ビルディング 2 階
TEL: 03-3254-1335 FAX: 03-3254-1339
E-mail: t.sakaguchi@project-ishin.net

生み出すチカラ
届けるチカラ
伝えるチカラ

健康への願いをチカラに変えて。



キョーリン リメディオ株式会社

Kyorin
健康はキョーリンの願いです。

TERADA NAOKI

neo
MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

福井の泌尿器医療の
イノベーションに挑む

University of Fukui Hospital



多種の疾患と手術を学べる環境

福井大学医学部附属病院泌尿器科では、前立腺、腎臓、膀胱、尿管、陰茎、精巣に発生する尿路上皮がん、前立腺肥大症、尿路結石、腎移植、骨盤臓器脱、尿失禁、神経因性膀胱、間質性膀胱炎、男性不妊症、小児泌尿器疾患などを診療対象とし、守備範囲が非常に広い。手術に関しては、腹腔鏡手術やロボット手術をいち早く導入し、低侵襲治療を積極的にを行っている。若手医師にとって数多の疾患を一つの施設で学べる環境と言える。

一般的に、大学病院の泌尿器科では、高度な技術を要する手術に専念していることが多く、そうすることで、大学病院の本身である最新の医療に力を入れることができる。寺田直樹教授はこうした認識から、2022年の福井大学着任時、診療対象の集約化を検討していた。しかし、2年後のいま、考え方が変わったと語る。

「ここに来た頃、患者数の多い尿路結石や前立腺肥大症の手術をこなしていると、大学病院でなくてはできない手術に支障を来すのではないかと考えました。しかし、

難度の高い手術ばかりやっていると、新人医師は手術に入れない。大学におけるトレーニングは不可欠であり、疾患を特化すべきではない、そう考えるようになりました。若手は小さな手術からとりかかり、習熟度に応じて中難度、高難度の手術を担当し、段階的に技術を高めていく。多様な能力を身に付けるために、多くの経験を積む。そうした教育指導をしています。将来的には、一般的な手術は関連施設で行い、そこへ若手を研修に出すといった体制を組めればいい。目下は如何せん、泌尿器科の人材が少ないため、先々の目標としておきます」

連携体制については、福井大学医学部附属病院、福井県立病院、福井赤十字病院、福井県済生会病院、市立敦賀病院、公立小浜病院の各泌尿器科が福井県下の大半の手術を行い、均衡の取れた関係にある。これら6つの病院が主体となり、福井県泌尿器科医会を組織、定期的に症例や手術について発表し、互いのレベルアップを図っている。

診療の質を担保するガイドライン作成

寺田教授がここ2年、推し進めてきたのは診療の標準化である。数ある泌尿器疾患に対し、福井大学医学部附属病院泌尿器科としての診療方針を明文化する。最良と考えられる検査の段取り、手術や投薬などの治療の選択、その後のフォローアップについて、医局で議論しながら事細かに決める。その議論の過程や、診療方針を決定した根拠も明らかにする。また、医療の進歩に対応するため、毎年アップデートを行う。こうして確立された診療ガイドラインは、同科のホームページで関連病院や同門のクリニックに公開。かくして、

同科だけでなく、福井の泌尿器科全体のスキルアップが期待できる。寺田教授はさらに、外科系医師を増やすことも命題とする。福井大学医学部医学科の卒業者のうち福井に残るのは3割程度、7割は関西や東海へ出てしまう。「福井に残らない理由を6年生に聞いてみたところ、2018年に福井は豪雪に見舞われ、それがトラウマになっていると言うんです」

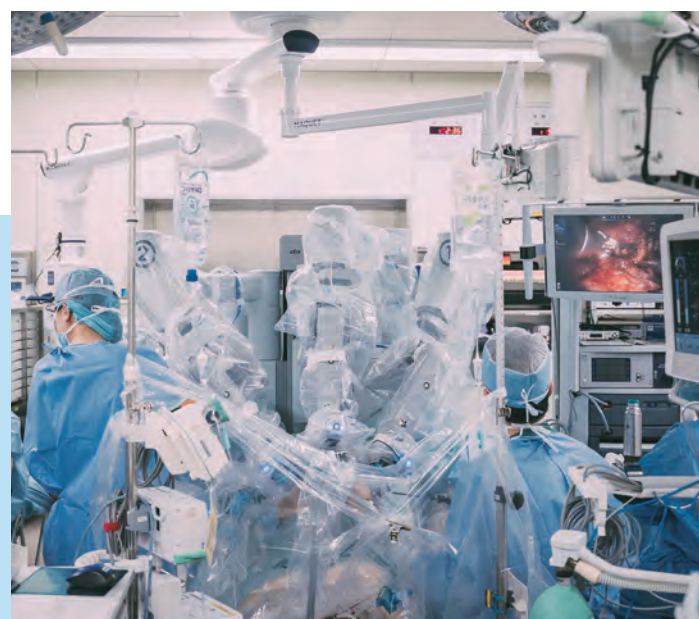
「福井に残らない理由を6年生に聞いてみたところ、2018年に福井は豪雪に見舞われ、それがトラウマになっていると言うんです」

ね。確かに、北陸道や国道で車が立往生して大混乱を生じました。それが、福井を離れる本当の理由かどうか、わかりませんが」(笑) 外科系医師はたいへん多忙であるし、手術は長時間に及ぶことも少なくない。それでも教授は、手術の素晴らしさを学生に知ってもらうと、講義や臨床実習を介して自ら積極的に勧誘に動く。それが功を奏して昨年度は4名が泌尿器科に入局した。

「先生の努力の賜物です、と持ち上げていただきました。けれども、今年度の志願者はゼロ。まだまだアプローチが足りません」

手術の面白さを宣伝する良策としては、泌尿器科が得意とする腹腔鏡手術やロボット手術をシミュレーターで体験する実習を増やそうと考えている。

福井大学医学部附属病院では2013年にda Vinci Siを導入。当時のシミュレーターはあまり芳しいものではなかった。以降10年間、同大では手術支援ロボットを更新しなかったが、2024年4月、国産の手術支援ロボットhinotoriを、9月にはda Vinci Xiを導入。そのシミュレーターは、術者がロ



ロボットを操縦するコンソールと一体化されており、訓練者はあたかも自らが実機を操作しているかのような臨場感を得られるという。

「ロボット手術は、従来の外科手術のイメージを刷新するものであると、私は確信しています。4、5年生に対してロボット手術のシミュレーションを重ねれば、4年後くらいには外科医を志望する人材が増えてくるはず。粘り強く働きかけます」

専門は前立腺がん研究、他の研究にも拍車

寺田教授は前立腺がんの研究をライフワークとし、15年以上、基礎研究と臨床研究に取り組んでいる。日本において現在、前立腺がんは男性が罹患するがん種の1位。早期前立腺がんの予後は良好であるが、1〜2割は進行性である。進行性前立腺がんの標準治療はアンドロゲンをブロックする去勢療法が選択されるが、多くは去勢抵抗性前立腺がんに変化し、その予後は不良である。

寺田教授は、ヒトの前立腺がん組織を免疫不全マウスに直接移植するマウスモデル「Patient derived xenograft: PDX」を樹立、薬効の評価や遺伝子解析を行い、新規の治療標的分子やバイオマーカーを探索している。一般に、マウスを用いてがんに対する薬効評価を行う場合、がんの細胞株を免疫不全マウスに移植して作成する「Cell line-derived xenograft: CDX」を使う。しかし、CDXモデルで有効性が示されても、実際のがん患者に投与して有効性を示す薬剤は少ない。その原因としては、CDXモデルの腫瘍は、患者の腫瘍とは組織構造が異なること、患者の腫瘍には様々な顔つきのがん細胞が

存在するが、CDXモデルの腫瘍は同じ顔つきばかりになってしまいうことなどが指摘される。

一方、PDXモデルは、腫瘍の組織構造が患者のそれに近似し、がん細胞の不均一性が保たれ、遺伝子異常も維持されるという特性がある。ゆえに、PDXモデルによる薬効評価と臨床での投薬結果との一致率が高いという報告がある。寺田教授が長年にわたり樹立してきた多種のPDXモデルも、ヒトの前立腺がんの組織構造や病理学的状態を再現している。「福井大学に来てからは、CDXモデル

を用いて実験をしていましたが、PDXモデルを扱える土台が概ね整ったので、今後はPDXモデルを用いた研究に移行しようと考えています」

以上の前立腺がん研究のほか、福井大学の腫瘍病理学教室と共同研究を行っている。膀胱がんや腎がんに関し、糖鎖の硫酸化シアルルイスXが血行性転移に関与している可能性があることを示した。また、現在はシアリルルイス抗原が血中バイオマーカーとして有用であるかどうかの検証を行っている。疾患モデルラットを用いた排尿

機能の研究も活発である。脳梗塞モデルラットや、食塩感受性高血圧モデルラットを使い、蓄尿障害の発生メカニズムや、過活動膀胱や排尿障害の治療薬の作用メカニズムについて検討。また、糖尿病モデルラットに対して様々な治療薬を投与し、血流の変化に伴う膀胱機能の変化や、前立腺の組織学的変化を評価するという研究を行い、興味深い知見を数多く得ている。

様々な邂逅に導かれて

寺田教授が医学の道を選んだの





寺田 直樹 てらだ なおき

福井大学学術研究院医学系部門
器官制御医学講座 泌尿器科学分野 教授

【略歴】

1998年 京都大学医学部卒業
1998年 京都大学医学部泌尿器科入局
1999年 倉敷中央病院泌尿器科
2003年 大阪赤十字病院泌尿器科
2006年 京都大学医学部大学院生
2010年 ジョンス・ホプキンス大学 ポスドク
2012年 京都大学医学部泌尿器科助教
2017年 宮崎大学医学部泌尿器科講師
2021年 宮崎大学医学部泌尿器科准教授
2022年 福井大学医学部泌尿器科教授

行かれるように、ということ。たとえ、悪い情報を患者さんに伝えることになっても、できる限り患者さんが思い悩まないように、また、心をサポートするように努めています。ポリクリに來る学生にもよく話しています。われわれはサービシ業なのだから、患者さんに満足していただかないと」

福井大学医学部附属病院泌尿器科の標準治療の策定、研究の活性化、人財育成：寺田教授が先導する革新は着々と進んでいる。



は、幼少時、絶えず医者に掛かっていたこと、あるいは両親による「刷り込み」ではないか、と笑う。自営業で苦勞してきた両親は、手に職をつけることの大切さを常に語っていた。そして、自分を可愛がってくれた祖父が、病床のおぼろげな意識のもと、「お医者はいえぞ」とつぶやいた最期の言葉は今も覚えていいる。

京都大学医学部泌尿器科に入局して2年目、派遣された倉敷中央病院では得難き出会いがあった。当時の泌尿器科の主任部長であり、同門の先輩にあたる、東北大学泌尿器科名誉教授の荒井陽一医師だ。

「臨床・手術と研究とを両立できて一人前、ということを叩きこんでくださった。荒井先生は、前立腺がんの手術の第一人者でありながら、様々な臨床研究を行い、膨大な論文を書かれていました。忙しい中、何もわかっていない私に、臨床研究の方法論を懇切丁寧に教えてくださった。これまで、いろいろな方からご指導を受けましたが、最も影響を受けた方が荒井先生です」

「医師として心掛けていることは、患者さんが診察室から笑顔で出て

110年以上、地域医療の要

医療法人林病院（以下林病院）は大正2年（1913年）11月の創設で、111年もの歴史がある。医療法人になったのは昭和26年（1951年）、平成9年（1997年）には在宅支援事業として居宅かいごしえん府中、訪問看護ステーション府中、訪問介護ステーション府中を開設。平成13年（2001年）に健診部を設置、平成15年（2003年）には回復期リハビリテーション病棟を設け、急性期から在宅までシームレスな医療を提供する体制を確立する。平成20年（2008年）には通所リハビリテーションを開設、平成24年（2012年）にDPC対象病院となる。令和元年（2019年）7月に現在の新病院で診療を開始、現在に至っている。

同院は整形外科、脳神経外科、消化器外科、胸部外科など手術を中心とする外科系診療に力を入れており、関節鏡や腹腔鏡による鏡視下手術やカテーテル治療など低侵襲治療にも積極的に取り組む。

公的病院のない越前市において急性期医療を担い、重症患者を受け入れ、かかりつけ医の機能も果たし、丹南医療圏を支えてきた。病院で働く職員たちはそのことを誇りに思い、良心的な医療を行ってきたのである。

病床数については、新病院への移転前は216床だったが、移転を機に206床、令和2年（2020年）には現在の199床に減床。現在、DPC病棟が1棟、地域包括ケア病棟が3棟、回復期リハビリ病棟が1棟という構成である。

救急に関しては、南越消防組合のデータによれば、2023年度は総搬送件数3917件、管内医療機関への搬送は約74%、そのうち林病院1437件（36%）、中村病院1363件（35%）、市外病院への搬送1008件である。昨年度の救急受入要請への応需率は92・6%で、今年度は4月から7月の4カ月間ですでに、応需率約97%以上の高い水準を維持している。



医療法人林病院 病院長 服部 泰章



医師の確保や連携を模索

服部泰章病院長は2019年、林病院に着任。新病院が竣工した時期で、入院医療を中心に救急・急性期医療に力点を置き、病院機能を整理すべきではないかと考えていた。しかし、病院は回復期、慢性期、在宅医療も従来通り継続。DPC病棟だけでなく、地域包括ケア病棟にも救急・急性期を受け入れ、また、地域では稀少な回復期リハビリテーション病棟を活用して非常に幅広い医療を提供する体制を変えなかった。

「医師もその他の職種も、当院で可能な限り治療を行い、患者さんが地元で治療を完結できるようにしたいという思いを強く持っています。大変素晴らしいし、病院の強みであると思います。しかし、最近の医療集約化の流れや、今年から始まった医師の働き方改革に対応するには、これまで通りの医療体制を続けるのは困難になりつつあります。最も問題になるのが医師不足で、診療体制の維持すら危ぶまれます。これからどうすれば病院が生き残っていけるのか、

真剣に考えるべき時です」

また、DPC病棟については、2024年度の診療報酬改訂で要件が厳しくなり、このままでは2026年度にはDPC制度からの撤退を余儀なくされる。地域の急性期・救急医療を担う林病院としては、基準が厳しいからと言ってギブアップするのは忍びなく、今年度7月からDPC病棟の運用に力を入れている。

一方、医師の確保、特に内科と麻酔科は喫緊の課題だ。脳神経外科もこの4月から常勤1名になり、外科も1名欠けるとほとんどの手術ができない。

「長年にわたり、多くの診療科の医師を、京都大学と福井大学から派遣してもらっています。これからも、丹南医療圏のために、当院を支援していただけるようお願いしたい」

福井の四大病院である福井県立病院、福井赤十字病院、福井県済生会病院、福井大学医学部附属病院との連携も重視しており、林病院での治療が困難な場合は、これらの基幹病院に送っている。また、開放型病床を運営することで地域

の医療機関・クリニックとの協力関係を保持。コロナ禍で連携医との交流会が途絶えていたが、今秋には5年ぶりに再開する予定だ。

さらに、服部病院長は、地域で林病院と同様、救急・急性期に対応している中村病院との連携を模索している。武生医師会長である林病院の林秀樹副理事長からは、行政との連携も進めるようにとの意見があり、今年の夏から越前市の関係職員と中村病院病院長とで地域医療に係る懇談会を持つようになった。救急医療や災害医療に関する課題に取り組み、将来的には丹南医療圏ということで、鯖江市や公立丹南病院などとの連携体制を目指していく。

こうした行政との連携に乗り出したのは、コロナ禍の影響によるものだろう。林病院では福井県に新型コロナウイルス患者が出た当初、病棟管理やスタッフ確保の困難さから、コロナ患者の入院受入れに躊躇していた。ところが、2021年6月から感染が拡大、県の正式な要請を受け、専用病棟を開設。越前市はブラジル人の在住が多く、ポルトガル語しか話せ

ない患者には、職員らは対応に苦労したと言う。

万能型外科医として活躍

服部病院長の父親は浄土真宗の布教師として中国に渡り、医師の資格を取得して外科医として活動していた。日本に帰国したのは終戦から8年後のことだ。彼のように外地で医師免許を取得した者に對して、日本の医師免許を与える制度も存在していたようだが、終戦から8年という長い月日が経過していたこと、彼にその情報がうまく伝わっていなかったのではなかなど理由はいくつか考えられるが、帰国後、父親は医師を続けることができなかった。このことが自分を医師への道に進ませたのかもしれないと語る。外科を選んだのは父親の影響だけでなく、全身を診ることができ、手術という強力な治療手段を駆使できる診療科だから、という理由と、「ブラックジャック」に憧れていたこと、と笑う。

服部病院長が大学での研修後に赴任したのは、常勤の外科医が3



人（十病院長）という田舎の病院。

ほぼ全ての手術に参加でき、執刀医になる機会にも恵まれた。H2ブロッカーが市販される直前の時期で、上部消化管出血の緊急手術がたくさんあり、消化器外科を学ぶ若い医師としては多くの経験を積むことができた。とにかく、マンパワー不足で外科医は何にでも呼び出されることが日常だった。

「当時の病院は休日などという発想は無く、夜打ち朝駆けは日常茶飯事。それが染みついてしまったことは、医師の働き方改革を実行するうえでなかなかの障害となっています」

その後、都会の大病院で勤務する機会を得、今度は消化器外科を中心に手術ばかりを経験するようになり、大概の手術はできるようになっていく。その後、大学院に入学、血管造影の特技を利用してデータを取る研究に当たり、カテーテルとガイドワイヤーを操る技術を修得。この技術は、その後の臨床医としての活動において大きな力となる。大学院修了後に勤務した病院では腹腔鏡手術を行いたいと申し出て導入してもらい、

積極的に取り組んだ。

今後のあるべき姿を 見据えた改革

服部病院長は、職員の患者に対する接遇について、つぎのように考えている。接遇は医療資源に負担をかけることなく、医療の質を担保する。患者に対し、上から視線にならないこと、馴れ馴れしくなり過ぎないこと、きちんと敬意を払った態度と言葉遣いを心掛けることが大切である。

また、電子カルテの端末から離れる時は、必ずログアウト、あるいはスクリーンセイバーを起動するなど、業務上の規則は遵守するようにと。『高度な医学知識や医療技術を身に付けることは重要なことですが、まず、そういった基本的な心掛けを疎かにしてはならない』と話す。

林病院が、新病院の建設に際し、入院環境を改善し、手術室や医療機器を整備したのは、手術や急性期治療などの入院診療にシフトすることを目標にしていたはず。外来はそのための窓口であり、初診

外来では連携のクリニックから紹介された患者を、長く待たせることなくスムーズに受け入れる体制を確立すべきだと服部病院長は考えている。再診外来では、大学から来てくれる医師の専門外来以外は、術前検査や入院準備、退院後の短期間経過観察などを中心とし、治療が一段落して状態が落ち着いたら患者はできるだけ地域のクリニックに返す。そして、精密検査や専門性の高い診療が再び必要になった場合には、改めて病院を受診していただく。そういう形を求めている。

「患者さんの中には、林病院がかりつけ医であると仰る方が多くおられますし、当院の職員にも伝統的にそのような意識を持っている人が少なくないのは事実です。地域ぐるみの意識改革が必要で、なかなかハードルは高いであろうと思います。やりたいと思う医療を続けながら林病院が存続できるのか、あるいは診療のあり方を大きく変えざるを得ないのか、本当に突き詰めて考えるべきところまできています。地域の先生方との協力体制や近隣医療圏の大病院と

の連携を含めて、地域医療において当院が果たすべき役割、守備範囲をきちんと設定し、誇りを持ってそれにしっかり対応していく必要があります。そのためにどうしたらよいか、皆で知恵を絞りたい。」

そして、病院長は外科医としての医師人生をこう振り返る。

「二人の患者さんを最初から最後まで診るというスタイルで、手術だけでなく内視鏡やIVRの技術もほぼ全て自分でやってきました。しかし、そんなスタイルはいまどきの医療制度の潮流に逆行しています。内視鏡については当院に来てからは一切やりませんというところで押し通しています。というのは、下手に手を出すとなんか取れなくなることがわかっていて、何です。何でもやるということとは、何もできなくなることにつながりかねないという面もあります。この先、私のようなタイプの外科医を育成することは難しいと感じています」

林病院にとって適正な医療体制や職員の意識向上をどう図っているのか、は服部病院長の肩に掛かっている。



地域に貢献できる
高い専門性と
豊かな人間性を備えた
看護師を育成



福井県立看護専門学校

70年以上の歴史を誇る
公立の専門学校

福井県立看護専門学校は、昭和27（1952）年4月、福井県立高等看護学院として創立された。今日に至る約70年間に輩出した看護師数は2600人以上。修業年限3年（全日制）の第一看護学科を置き、1学年の定員は40名、総定員は120名。専門士（看護専門課程）、看護師国家試験受験資格、保健師・助産師養成機関の受験資格、看護大学編入学試験の受験資格を取得できる。

校長である西田美幸氏は、卒後41年間、県立病院に勤務、看護部長を勤め上げ、本年3月末に退職。同校は福井県立病院に隣接し、これまで校長は県立病院の院長が兼務してきたが、今年度、看護師である西田氏が就任した。

「最初、校長という責務を果たせるのか、かなり不安がありました。5カ月が経ち、周囲の方々の協力を得ながら業務をこなしています。校長室の前には学生ホールがありまして、そこで全学年がお昼のお弁当を食べますし、時にはグループワークやカンファレンス

を行っています。いつも賑やかな笑い声が響き、『校長先生、おはようございます』『週末ですね、ゆっくりお休みください』というような、しつかりした挨拶ができており、うれしく感じています。学生からねぎらいの言葉を掛けてもらい、たくさんエネルギーを分けてもらって私も元気に過ごすごことができています」

看護師への夢を全力支援

そう微笑む西田校長は就任当初、つぎのような抱負を掲げている。福井県立看護専門学校の使命は、看護の基礎および豊かな人間性を身に付けた優れた看護師を育成することである。高い知識や技術だけでなく、思いやりや優しさといった「看護の心」を教授しなくてはならない。

「これまでは、看護大学や専門学校を訪ねし福井県立病院への就職をお願いしていましたが、今年からは依頼を受ける逆の立場になりました。看護学生の育成に責任と決意をもって当たり、地域や医療機関に貢献できる看護師を送り出さなくては、と強く感じています」



もう一つの抱負は、看護基礎教育を充実しなければならぬ。学生と最も接する教員の資質の維持・向上に重点を置くことが不可欠であるということ。教員は、福井県立病院での勤務歴に裏打ちされた看護のスキルと経験が豊かであるが、さらに、教員自身の能力をブラッシュアップし、学生の指導・育成の向上に繋げることが必要である。

「学生一人ひとりの個性や目標を大切にし、その成長をサポートし、夢を実現できるよう私たちが支援していきたい。学生たちがここで学んでよかった、と心から思えるよう、学生たちの未来を拓くことに全力を尽くしたい」

また、福井県では、2025年における看護師不足がすでに試算されており、人材確保という役目も福井県立看護専門学校に課せられている。

一方、副校長の黒川洋子氏は福井県立病院で助産師として勤務し、西田氏の片腕として看護部次長を務め、4月から現職に就いた。

「西田校長と長年、職場をともにしてきました。たいへんマネージメント力のあるかたで尊敬しています。一緒に仕事をしていくスタ

イルを本校でも継続したいと思っています」

専門性と多様性に富む教育体制

福井県立看護専門学校の特長は主に4つある。

一つめの特長は、実践能力を重視した教育体制を整えていること。実習施設である福井県立病院は、三次救命救急センターを備えた超急性期病院である。専門分野においては、各科の医師、各分野の認定看護師や専門看護師、病棟看護師、薬剤師などコメディカル、その他の基礎分野として社会学、教育学等においては大学の先生方を講師としてお願いしている。近年、地域包括ケアシステムが提唱されるなか、診療や療養の場が多様化し、嶺北管内の福祉・介護施設や県・市町の医療福祉機関等の協力を得、地域実習の強化を図っている。ほとんどの学生は病院に就職を希望するため、地域・在宅看護を学ぶ機会は学生の今しか、そのチャンスはない、と西田校長は考えている。

「病院で勤務していても、地域包

括ケアや在宅看護の知識があれば、患者さんが退院後も住み慣れた地域で自分らしい生活を送るための支援ができると考えています」

二つめは、成長と学びを支えるカリキュラムとして『学習支援論』があります。1年生の入学直後か

ます。

三つめは、県立病院の看護部と連携した、教員の資質向上を図る研修を取り入れていること。教員が病院で行われている研修に参入することで最新の医療・看護を学び、学生指導のレベルアップに繋



ら縦割り班を編成し、上級生下級生間で看護技術や実習記録の支援を行っています。一連の学習過程の中で、他者の学びを支えると同時に自らも学ぶ姿勢を身につけ、社会人基礎力の向上につなげてい

げる。また、福井県立看護専門学校の教員を病院から募る際には、看護現場と学生への看護教育との違いにとまどうことのないよう、看護学校での授業研修も行う予定である。

苦あり楽あり、それでもやりがい

福井県立病院時代の、心に刻まれたことについて両氏に聞いた。

西田校長は、看護部で新たな取り組みをする場合、周囲の理解と協力を得ることが大事であり、まず師長に説明して実現に繋げていった、と語る。「そうした過程で

四つめは、高い国家試験合格率。1年次後期から看護師国家試験対策をカリキュラムに取り入れ、教員が専門領域ごとに指導を行う。

「今年の全国の看護師国家試験合格率は過去10年間で一番低く、難しかったと聞いています。本校においては、おかげさまで4年連続100%の合格率です。これは教員の熱意の賜物と考えています。勉強会を行ったり、模擬試験で合格に不安のあると思われる学生には、お正月でも『がんばっているか』と電話して声をかけたりしたと聞いています」と黒川副校長。また、就職や進学に関してもほぼ100%を維持、県内外の医療機関や大学に編入し、看護師・保健師・助産師として活躍している。



左より西田美幸校長、黒川洋子副校長

けれども、それ以上に患者さんと関わるなかで、自分自身が成長できるということ、患者さんやご家族から笑顔や感謝の言葉をいただけること、なにより元気に回復するお姿を間近で見ることができ、喜びを分かち合える。魅力に溢れたやりがいのある職業です。新人看護師の方へ。初めは、右も左もわからないことが多く、学生時代とのギャップに戸惑いを感じる方が多いと思います。もちろん、患者の命を預かっている職業なので、注意されることも多く、つらいこともあるでしょう。先輩も最初からできていたわけではありません。みんな同じ道を辿って乗り越えてきました。恥ずかしいと思わずにわからないことは聞いたり、相談したりして焦らずに学んでください。そして、経験年数を重ねるごとに看護師の仕事が好きになっていきます。勉強しなければならぬということ、悩むことも多いですが、患者さんが元気になっていく姿に寄り添えるのは私たち看護師にしかできません。毎日が充実し、喜びや誇りに繋がっていきます」

黒川副校長はつぎのような言葉を送る。

「私は、看護師資格に加え、保健師か助産師、どちらかの資格を取ろうと考えまして助産師を選びました。出産はライフイベントのなかで最も輝かしいもの。その場に立ち会えるというのは本当に大きな喜びなんです。陣痛が弱くてお産が進まず苦しんでいた産婦さんに、環境を整え、リラックスを促し、手を添えることで、順調に分娩が進行し、母子ともに健康な出産を迎えられたとき、看護の力を感じ、思わず『やったー』と声をあげたくなる、看護にはそんな感動する瞬間があります」

「看護師になり立ての時期は、どちらかと言えばつらいことのほうが多いのではないかと思います。でも、そういう時こそ、なぜ看護師になろうと思ったのかという初心を思い出してほしい。そして経験を積み重ねて、専門看護師や認定看護師などいろいろな選択肢がありますから、自分がやりがいを感じられる道を選んでください」

西田校長と黒川副校長、懸命な人の言葉は胸に響く。福井県立看護専門学校の学生が両氏に導かれ、スキルもメンタルも逞しい看護師に！とエールを送りたい。



大事なものは、同僚や上司への感謝の気持ちを持つこと」。院長など上司から下りてくる事案も「できません」とは言わない、を信条にしてきた。

「できませんと言ってしまったら何ごとも実現しません。どうしたらできるかを考えるようにしてきました。上司に『西田さんは決してnoとは言わない』と褒められ、うれしかったですね」

黒川副校長はコロナ禍における組織的な取り組みが良い思い出だと言う。2020年3月、病院は第一種・第二種感染症指定医療機関として県内一例目のコロナ患者の受け入れを開始し、専門チーム（SIT）がその担当となる。ところが、未知の感染症への恐怖からSITに欠員が出て、これを日替わりの応援看護職で補充。その後、感染拡大、ならびに応援看護職が毎日替わることで、看護職や感染管理認定看護師（ICN）、医師にストレスが生じ、患者にも不安を与えることに。そこで、応援看護職を固定化し、感染制御看護師（SUBICN）と命名。SUBICNは、コロナ病棟勤務が可能であること、SUBICNへの

理解と意欲があることなどを条件に各部署から選出された。

「SUBICNを導入したことで、コロナ病棟での業務は削減され、看護職への負担も減って、コロナ感染症に対応できる安全な看護体制を整えることができました。この取り組みを発表しないのはもったいない、ということ、西田看護部長（当時）と私がレポートを作成し、日本看護協会へ締め切りギリギリ、送りました（笑）。苦労してまとめた甲斐があつて『看護業務の効率化先進事例アワード2023』の特別賞をいただきました」

看護師を目指す若者たちへ

西田校長は、小中学校時代、目にした看護師の姿に憧れ、「私もいつかは」と決めていたと言う。看護師を目指す若者や新人看護師に、こんなメッセージを送る。

「看護師を目指す人へ。本校にいられたら、医療の未来を支える看護のプロになれるよう、しっかりと応援します！看護師の仕事は、楽しいことばかりではなく、悲しいこともつらいこともあります。

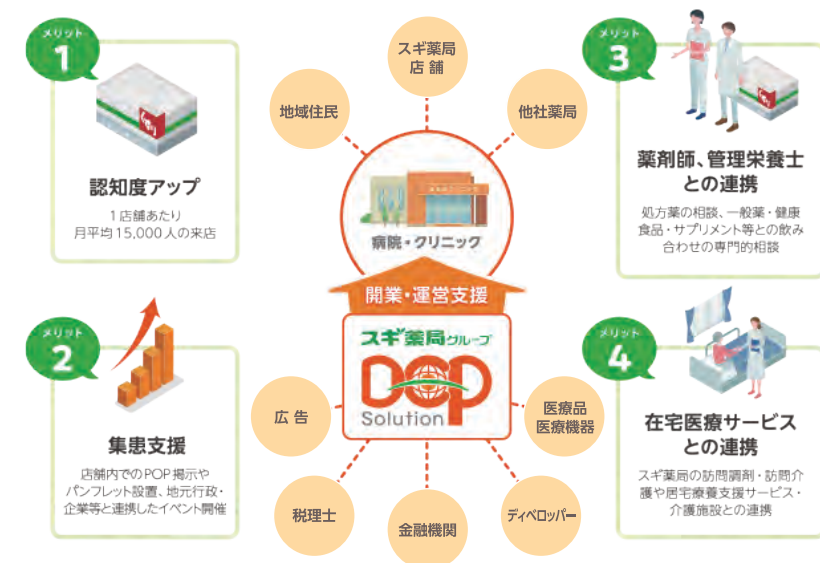
点眼薬一滴、一滴をつくるためには、
高度な技術と先進の設備環境、そして精確な生産ラインが求められます。
人々の健康に深く関わる医薬品の製造・販売を担うものとして、
患者さまの信頼に応えたいという思いを、積み重ねること。
日東メディックは、患者さまの信頼に応える使命感を糧として、
つねに患者さまの視点に立って点眼薬を製造してまいります。
そして立山連峰を望む富山から、瞳の未来をまっすぐに見つめていきます。

DCPソリューションは
豊富な経験とネットワークを持つ
先生方のよきパートナーとして
開業支援サービスを提供しています。

ドラッグストア併設で 理想の開業を！

DCPソリューションの提供サービス

経営理念、診療方針の作成
開業までのスケジュール作成
開業地の選定、診療圏分析
事業計画の策定
融資の打診及び交渉
設計、内装業者紹介及びアドバイス
医療機器選定
税理士、公認会計士の紹介
広告相談
従業員募集、採用、教育の補助
開設手続き
開業後の経営支援、拡大展開
継承支援



0120-911-545
平日(土曜・日曜・祝日を除く)の9時00分～18時00分

拠点

関東エリア(本社) ●東京都千代田区鍛冶町二丁目6番1号
堀内ビルディング2階
中部エリア ●愛知県大府市横根町新江62番地1号
関西エリア ●大阪府大阪市淀川区宮原4丁目4-48
北陸・長野エリア ●石川県金沢市藤江北4丁目280番地

開業の事例や
先生方の声が
ご覧頂けます



<https://dcp-sol.com/article/docvoice/>

谷

University of Fukui Hospital

大

緑内障の先進治療に注力

福井大学医学部附属病院眼科は、福井県における特定機能病院の一診療科として、眼科全般にわたり診療を行っている。なかでも力を入れているのは、緑内障と糖尿病網膜症である。

緑内障は、眼球中の房水が多くなり、眼圧が高くなることで視神経を圧迫し、視野が徐々に欠けていく疾患。進行すると最終的には失明に至り、日本の中途失明の原因第1位となっている。緑内障には、眼圧が上昇する原因によっていくつかの種類に分けられ、眼圧が正常であるにもかかわらず視神経が障害される正常眼圧緑内障もある。房水が滞留する原因は、加齢による排出機能の低下や落屑物質による排出路の詰まりなどが指摘されているが、緑内障の発症機序はいまだ明らかになっていない。

緑内障の治療はまず、点眼薬で眼圧を下げる治療を行い、それでも十分に眼圧が下がらず、視野の欠損が進行する場合、手術を行う。手術の世界的なスタンダードは

線維柱帯切除術（トラベクレクトミー）だ。眼の外から強膜を開き、強膜弁を作成、露出した線維柱帯（角膜と虹彩のつなぎ目）を切除し、房水の新たな排出口を設ける。強い眼圧下降の効果が期待でき、様々な緑内障の病型に適応できる。

福井大学医学部附属病院眼科を率いる稲谷大教授は緑内障を専門とし、手術のエキスパートとして実績を重ねてきた。同科において、線維柱帯切除術を行っても効果の低い病型に対し、緑内障チューブシャント術、プリザーフロマイクロシャント術、iStentなどの高度医療を行っている。

同科の緑内障チューブシャント術は、バルベルト緑内障インプラントを用いる術式である。バルベルトインプラントはシリコン製のチューブとプレートから成る人工物で、プレートを結膜の下に留置して被膜とし、プレートに付いたチューブを眼球から被膜へ通し、房水を排出させて眼圧を下げる。

また、プリザーフロマイクロシャント手術とiStentは、線維柱帯切除術に取って代わるで

「難治性眼科疾患と対峙する
Surgeon 集団」

Inatani Masaru



糖尿病網膜症治療や 角膜移植も得意分野

糖尿病網膜症は糖尿病眼合併症の一つであり、ほかに糖尿病白内障、糖尿病角膜症などがある。ゆっくりと進行し、高血糖によって毛細血管が傷害されていくが、初期には自覚症状がない。福井大学医学部附属病院眼科では、糖尿病網膜症が進行して硝子体出血、さらに増殖膜を伴う牽引性網膜剥離を来した症例に対し、積極的に外科的手術を行っている。

網膜剥離、硝子体出血、増殖糖尿病網膜症などに適応される硝子体手術は、白目の部分から器具を挿入し、硝子体の切除や網膜の治療を行うが、同科では非接触式眼底広角観察システムを用いた安全な手術を導入。この手術に、傷口の極めて小さい27ゲージシステム（0.4mmの切開口から硝子体カッターなどの器具を挿入）を併用することで、速やかな術後回復を可能にしている。

また、術中に出血しやすく合併症の多い血管新生緑内障に進行した難治性症例に対し、稲谷教授らは、抗血管内皮増殖因子抗体（抗VEGF抗体）を術前に投与することで、術



あろう低侵襲の最新手術である。前者のマイクロシャントは長さ8.5mm、直径0.35mmのチューブ状デバイスで、これを眼球の外側から前房内に差し込み、房水の排出路とする。チューブが極細のため房水が排出され過ぎず、眼圧の下げ過ぎを回避できる。一方、iStentは、正式には水晶体再建術併用眼内ドレーン挿入術といい、長さ1mmの極小ドレーンを線維柱帯に埋め込むことで房水の流れを改善する。この手術は白内障手術とセットで行われ、水晶体再建術で切開した部位を利用してiStentを挿入し、視機能と眼圧との同時改善を促す。

「緑内障の発症は40代から始まります。40代の約5%は緑内障という統計もあります。完治できる治療法はまだ確立されていませんから、緑内障になった場合、QOLを維持していくためには一生、視力を保持することが重要となります。該当年齢になったら、セルフチェックをしたり：ネット検索するといろいろ出てきます、また、定期的に眼底検査を受けたりして早期発見につなげていただきたい」 稲谷教授はこう語る。



中の出血リスクを抑えられることを報告。この薬剤は、網膜浮腫の軽減、出血・血管新生の抑制において非常に有用であると言う。

角膜移植に関しては、福井県には待機者が少ないというトピックスを標榜したい。福井県のアイバンクがたいへん熱心に活動していること、眼科医らが全面協力に賛同していること、亡くなった方における臓器提供の意思表示をしつかり確認していることなどが、その成果につながっている。

「角膜の献眼、移植の依頼は大学病院に寄せられます。クリニックでは対処はできませんし、献眼のタイムリミットは数時間。ですから、大学の医師がその要請には必ず応じてはいけません。それに加え、福井県には眼科のクリニックは多くないのに、高齢者が増えるに連れ、眼科疾患を抱える患者さんがクリニックに押し寄せ、どこもつかつかつ。これをバックアップするのも大学の役目です。大学病院の診療科というのは、病院での診療のほか、病院の外からの要請にも応じられる余力が無くてはいけません。そう私は考えています」

データ解析を駆使した 緑内障研究

稲谷教授は長らく、緑内障の病態に重要な組織である隅角と視神経の関係を研究してきた。

「かつては、マウスに緑内障を発症させ、その病態を説明しようとすると実験をしていました。当時、実験のアプローチは分子生物学や生化学が王道だったのですが、もはや時代から取り残されている感があります。学会発表も減っていますし。自分はこの分野を以て取り組んできた研究業績が認められ、本学の教授に抜擢されましたので。このようなトレンドの大きな変換は、インターネットや人工知能の出現によるものでしょう。ビッグデータをAIで解析するというスタイルが現在の主流」

かく語る教授も現在、そして、これからの潮流を見極めている。緑内障手術を受けた患者について、その予後の良好・不良にはどのようなファクターが関与しているのかを研究課題とし、膨大な臨床データを使って解析している。

また、緑内障における視神経障害の原因は眼圧上昇であるとされてき

たが、日本では正常眼圧緑内障が最も多い病型であり、眼圧以外のファクターが関与していると見るのが妥当ではないか、という指摘がある。教授はこれまで、緑内障の病態を説明する研究にはマウスを使って病態を再現してきたが、臨床データと人工知能のシミュレーションを駆使すれば、緑内障を三次元的に再現できるのではないかと。そう考え、体動や眼球運動に連動する硝子体液の動態に基づき、眼球各部位の圧負荷を計算できる流体力学解析システムを独自に開発。緑内障患者個々の眼球後極部の画像データから、その3D再現モデルを作成。流体力学解析によって、眼球後極部のどこにどれだけの圧負荷がかかっているのかというマッピングを作り、患者の視野欠損部との一致率を検証。こうした試みを進展させることで、緑内障における視神経障害の発症メカニズムとその要因の解明に迫ろうとしている。

「裸の王様の子ども」が エキスパートを育てる

稲谷大教授が京都大学の眼科学教室を志望したのは、第9代本田孔士

稲谷 大 いなたに まさる

福井大学医学部附属病院眼科 教授

【略歴】

1995年 京都大学卒
1996年 岸和田市民病院研修医
1997年 京都大学大学院生
2000年 京都大学眼科助教
2001年 米国バーナム研究所客員研究員
2003年 大阪赤十字病院眼科医員
2005年 熊本大学眼科助教
2006年 熊本大学眼科講師
2011年 福井大学医学部眼科教授
現在に至る



（よしひと）教授に惹かれたことがきっかけだ。当時、本田氏は「裸の王様の子ども」と呼ばれていた。

「裸の王様の童話は、だれでも知っていますよね。王様の行列を見物に来ていた城下の人々は、王様の見えない衣装を褒めたたえたけれど、ただ一人、ある男の子は、「王様は裸だよ！」と叫ぶ。本田先生はまさにそういうお人。こんなに真っ直ぐで自由闊達な先生の下なら、自分も自由にやれるのではないかと考えました。そもそも医師になろうと考えたのは、医師はおそらく、自分の裁量で物事を決められる。一般企業に勤めたら自分のための時間を取るのも難しいだろう：そういうことを考えあぐねた末に、医師の道を進むことにしました」

「その後、京都大学の院生になったとき、指導教官だったのが谷原秀信先生（前熊本大学附属病院長）。眼科マイクローサリーの父と言われた故永田誠先生が当時、奈良県の天理よろず相談所病院におられたのですが、そこで谷原先生は研修をされた。専門は緑内障でした。また、谷原先生も本田孔士先生の薫陶を受

けた方で、私の兄弟子にあたります。谷原先生は私を熊本大学に呼んでくださり、私は思う存分、研究に励むことができました」

そういう教授の来し方が現在の教室に反映されている。自由な気風をつくる。個々人のプライベートな時間を大切にしよう。カンファレンスになかなか集まらないならWebを使って医局のコミュニケーションを図ればいい。稲谷教授は、居心地のよい医局づくりに努めた。それが実って、いまや、福井大学医学部附属病院の眼科では、だれ一人辞めない。

「地方の病院の多くが人材不足に困窮していると聞きますが、当科ではそういう問題はありません。ただ、先ほども申しましたが、角膜移植のような急を要する状況に対応するのは大学の責務。十分な余力を持つるよう人材の育成に努めます」

そう語る教授の信条は、「経験に縛られない」20年、30年と医師として術者として経歴を積み、それが矜持になり、やがてコンサバティブに納まり、その保守性を医局に押

し付けてしまおう、というのである。

「10年前あたり、私は手術がものすごく上手かった（笑）。例えば、合併症のある難しい白内障の手術でも、速やかにやつてのけた。でも、この頃は、私より手術の速い中堅の先生が出てきました。一概に、速ければ上手いというわけではないですが、手術時間という点では、私の方が負けています」

福井大学医学部附属病院眼科における手術の年間総件数は約1700件、そのうちの緑内障手術の件数は全国でトップクラスである。ところが今年度は、2000件突破が見込まれるという。2023年5月には、眼科専門手術室の「目の手術室」も新設された。

「当科の手術件数については、年に50件ずつ増えていって、私が定年になるころ、2000件に達するかなど考えていたのですが、今年、一気に2000件。若い子たちが率先して頑張ってくれています」

医局がHappyに満たされていることこそ、医師が大らかに育つ秘訣、リベラル派のその人は胸を張る。

確実に届くを ずっと届けたい

今はもちろん、これからもずっと皆様の命と健康を支えたい。
Me ファルマは、明治グループの一員として、欠かすことのできない
ジェネリック医薬品を将来にわたってお届けしていきます。

■ Me ファルマ 3つの約束

安定供給



「必要なときにいつでも」
お届けします。

高品質



「新薬と同じ品質」で
お届けします。

経済性



「適正な価格」で
お届けします。

詳細はホームページでご覧いただけます



Me ファルマのホームページ

<https://www.meiji-seika-pharma.co.jp/me-pharma/>

Meファルマ株式会社

2024年5月作成

医療を支える。 人と地域の未来のために。

私たちが幸せな人生を歩むために、医療は、必要不可欠です。

しかし、世の中の変化とともに、医療は今、多くの課題を抱えています。

医療人材の採用から育成、キャリア支援、仕組み作りまで

私たち MCS は、HR（ヒューマンリソース）の分野で、医療の課題解決に向き合います。

医療関係者、生活者、地域社会、その未来のために。



「地域」と「医療」の架け橋として ヒューマンリソースの問題をトータルで支援する

スギ薬局グループ



詳しくは WEB へ



